

オイテケ堀

（乏しい食糧を分かち合う心を教えた）

其の頃の鯨井は、有泉・後ろの地区に渾々と湧く清らかな泉を一戸、一戸私有して二、三拾戸の民家がよりそうように生活の煙をあげていました。

その頃、生活はどうしていたかという、部落内で生活される食糧と、生活資材、其の他、天然、自然が恵んでくれた、清らかな泉、野に生える雑草、よく育った立ち木、そしてこればかりは他地区より豊かな川魚でした。しかしこれを得る範囲はあく迄自分達の住む権限内に限られていて、すべて自分達の力で為さねばならない自給自足の時代であったのです。そして、各戸が生産する、農作物の外に、部落共有の財産資源というと、雑草と川魚でした。特に夏の草は、家畜の飼料となり、田畑の直接の肥料として重要な資源でした。よし・カヤ類は干されて、屋根の葺き草となり、家の廻りにしっかりくりつけられて、カヤ壁となって冬の寒さから人々を守り、長いよしは、ヨシヅ、に加工されて、日除け、敷物等となったのです。鯨井には、川魚の生息に適した川がたくさん流れていました。鯨井の母なる入間川は、遠く吾野山中に水源を発し、清らかな流れは、鯨井の南から東へ包むようにて身を横たえ又、高麗南方の丘陵地帯から流れ出た小畦川と共に豊富に川魚を育てていたのです。

入間川は、特に流れが清らかで、丸く磨かれた玉石に躍る淡水魚の種類は、香魚と呼ばれる鮎を始めとして、クキ、ハヤ、ヤマベ、カジカといった、清流特有の魚であり昭和10年頃迄は、子供達は夏休みになると、一日中川で遊びくらし腹がへると、土手を越えてキュウリ、青ウリを喰い、川の水を飲んで過ごせたほどでした。又泉から流れる水は、いくすじかの掘りを耕地中に形成し、ナマズ、ウナギ、ドジョウウ、タナゴ、ギンギョバチ、といった川魚が清流と、やわらかい土をねぐらとして住んでいたのです。そして、小畦川は昔から九十九曲がりしているといわれ、その曲がり角の深い淵には、淡水魚の王者鯉がユーユーとたくさんたむろしていました。

昔から村には、「草と魚の見置はできない」と云われる云い伝えがありました。これは、たくさん魚のいる所を見つけ、又、草の生えている場所を見たので、次の日行ってみると、其の時は、魚はとられ、草は刈られてしまうと云う格言めいたものでした。だから、草を見れば其の場を去らず刈り、魚を見れば夜中にこっそり一人で行ってとってしまわなくてはだめだと云う、乏しい資源を巡る生活をかけた格言だったのです。

又、「上農の歩いた後には草が生えない」と云われ、これは、自分の畑を歩くにも、一草見れば、一草を抜き、刈草を見つければ、すぐに刈って肥料にしたと云う。篤農清

心の教えでした。姥捨山の傳説の中には、いよいよ、70歳になって、お山参り、「捨てられる年」に行くババが其の数日前に、後の家を守る嫁にだけ、こっそりと自分だけが知っている「ヤマメ」の生息場所を教え安心して息子に負われて山参りしたと云われています。小畦川周辺に傳わる、オイテケ掘の伝説は、自給自足の外に生活手段のなかった時代、大事な雑草と、唯一の動物質蛋白源とした部落共有とも云うべき淡水魚を大事な生活物資とした背景をもとにして語り伝えられたものです

昔、鯨井に与作と云う魚取の名人が住んでいました。昔から、「好きこそ物の上手なれ」と云う言葉がありましたが、此の人も其の通りで、決して村人の食生活お支える、共有物とも云うべき魚を一人じめにしてしまおうと云う気ではなく、魚を取ることが好きでたまらず、ひまさえあれば、小畦川をうろつき、耕地の堀の一寸つとした柳のした迄たんねんに見廻って魚を見つけるのが何よりの楽しみでした。ところが、今でもそうした心理は、鯉などの大物釣仲間には残っているようですが、一度、魚のいる場所を見つけてしまうとどうしても人に知られないように、こっそり一人で、しかも

夜の夜中に捕りに行ってしまうのです。此の与作の近所に、40歳を過ぎた此の世のすいも甘いもかぎ分け、人生の生き方を知り尽くした分別盛りの人が住んでいて、だんだんと、エスカレートして行く与作の様子と、もう与作の魚取に対して

だまっていられなくなった村人の動き方を静かに見守っていました。

「与作さーにも、ほんとに困ったもんだ。平素は、決して人あー悪かあねいだが、こと魚の事になるともう夢中こいで、いやはや家じゃ喰いきれねえで、きまり悪いもんだから、腐ると、畑さーうめちまってこねえだなんか犬にほじくられてすっかりわかつちまったそうじゃあねえかい」「今じぶん、あんまりとっちゃうと村の人に顔向が出来ねい」

8月中旬になると、田の草取りも終わり、耕地全体の土用干しの季節を迎えました。其の頃が丁度高温で魚も太り、又、水稻も水のいらぬ時なので、村の人達は待ってたとばかり、いくつかのグループに別れ大がかりな、共同のカイ取をやるのです。ところが、どうも今年は、当が外れ不魚でした。そしてそれがなんのためか、誰も口に出さずとも、特に今年は誰の目にもあまって来た。与作の独りじめのためだとわかっていたのです。そうした頃の、真暗い夜の事でした。与作は例によって、一人魚取にこっそり行きました。其の夜は、特別にたくさん魚がとれもう面白くて夢中で取っていると、どこからともなく「オイテケ、オイテケ」と、異様な、人の言葉とも思われぬ不気味な声が聞こえました。驚いて立ち、四方ををすかして見ましたが何も見えません。はて、気のせいかなと思い、もう十分過ぎるほどとれたのに又とり始めました。すると又「オイテケヤー、オイテケヤー」と、前よりも大きな声が聞え、しかも後の声は、前よりもはっきりと、無気味さを増し、だんだんと頭の上で、聞こえるではありませんか。与作は驚いたのなんの、いくら見廻しても誰も居ず、こりゃ、てっきりお狐様に化かされたかと、ビックリ仰天もう腰の抜ける程恐くなり、川から飛び出し、桶をのぞくと、あれほどとれたと思った魚が1匹もない。

益々、肝をつぶした与作は、空の桶をかつぐと一目散に家にとんで帰り、2、3日、青い顔してふるえていて、それからは、決して夜一人で魚取をやらなくなりました。
「うーん、これで安心だーもう与作のやつで丈夫だ、これも、村のためよ、でも猪のやつ5匹で、暗いもんだから、安心して喰っちめやがったアハー——ハ」与作の近所オジサンは、与作と村人の平和のために打った芝居の成功に満足し心から安心をした。しかし化かされたと信じ切った与作の話は、近所のオジサンがだまっていたので、オイテケ掘りの伝説となってしまいました。

鯨井史より抜粋 昭和58年3月31日 鯨井自治会発行

、